



横須賀の歩んだ昭和

文／藤井明広（横須賀市自然・人文博物館）

第4回 「伏龍」特攻隊と横須賀

今から80年前、ペリー上陸記念碑に面する久里浜海岸で、ある特攻作戦の訓練が行われていました（【図1】）。本号では、「アジア・太平洋戦争」末期に考案され、横須賀市内にも部隊が編制された「伏龍」特攻隊について紹介します。なお、「特攻」とは、旧日本軍が劣勢となった戦局を開戦するために行った「特別攻撃」のことです。航空機や魚雷、爆薬を搭載したモーターボートなどで敵に体当たりをし、搭乗員の命と引き換えに攻撃を行いました。

本号で紹介する「伏龍」特攻隊の任務は、隊員が水中5～7mの海底で待機し、約5mの竹棒につけた機雷（五式撃雷）で頭上を通過する敵の上陸用舟艇に体当たり攻撃を行うというものでした。日本の敗戦が濃厚となっていた戦争末期、連合国軍（米軍）の本土上陸を阻止するため、隊員には「人間機雷」となることが求められました。なお、隊員は上衣とズボンに分かれたゴム製の潜水具、ボルト4本で接続する潜水兜に潜水靴、前腹部に約9キロの重り、背面には150気圧の酸素ボンベ2本と空気の清浄缶を背負って海底に潜みました。その総重量は約80kgに及びました（【図2】）。

こうした「伏龍」特攻隊による訓練は、昭和20年（1945）4～5月頃には開始されており、同年8月の終戦時には久里浜・野比（神奈川県横須賀市）、情島（広島県呉市）、川棚（長崎県川棚町）で、あわせて約3000人もの若者が潜水訓練を受けていたとされます。隊員の主力は海軍飛行予科練習生（予科練）出身の少年飛行兵や十代の志願兵であり、その指揮官は予備学生出身の士官でした。横須賀市内（久里浜・野比）には「伏龍」特攻隊の部隊として「第71突撃隊（嵐部隊）」の本部や訓練所が設置され、主に久里浜海岸、野比海岸で潜水訓練を行っていました。

終戦を迎えたため、結果として「伏龍」特攻隊による特攻作戦は実行されることはありませんでしたが、戦時下に行われた潜水訓練中の事故により多数の犠牲者が出たとされています。主な死亡事故の原因は、隊員が装備した「清浄缶」の破損にありました。「清浄缶」には、隊員の呼気中に含まれる二酸化炭素を除去して再び清浄な空気として使用するため、「苛性ソーダ」（たんぱく質を溶かす性質を持つ「劇薬」、水に溶かすと多量の熱が発生）が入っていました。しかし、ブリキ製であった「清浄缶」はあまりにも薄く、海中の岩に当たることや、水圧によって缶が破れるということが起こりました。その結果、

「苛性ソーダ」が海水と化学反応をして沸騰し、管を逆流して隊員の口に入ることによって死に至りました。その他、海中で呼吸法を間違えたことによる炭酸ガス中毒、酸素ボンベの残量が不足したことによる酸欠などの事故も相次いだとされます。しかしながら、「伏龍」特攻隊の存在自体が軍の機密事項であったため、事故死した隊員の遺族にも事故の詳しい状況や死因などは伝えられることは無かったといえます。また、終戦時に軍の記録が廃棄されたことから、潜水訓練中の事故で亡くなった隊員の数など「伏龍」特攻隊の実態は現在でも不詳です。

【参考文献】

- 瀬口晴義『人間機雷「伏龍」特攻隊』（講談社、2005年）
- 門奈鷹一郎『新装解説版 海軍「伏龍」特攻隊』（光人社NF文庫、2023年）



【図1】「伏龍」特攻隊の潜水訓練が行われていた久里浜海岸（「昭和20年（1945）9月～11月、ペリー上陸記念碑再建現場から海岸方面」、横須賀市立中央図書館郷土資料室所蔵）



【図2】「伏龍」特攻隊員の模型（門奈鷹一郎氏旧蔵）